Web版「日本の息吹」（平成１４年８月号）

愛の聖地、靖國神社

―若い皆さんに伝えたいこと

若い皆さんに伝えたいこと首相の参拝問題、国立追悼施設問題だけでなく、ご遺族の高齢化など靖國神社を巡る環境は厳しさを増すばかりだ。いかにして神社をお守りしていくか。今年、靖國神社崇敬奉賛会の会長に就任された久松会長にお話を伺った

インタビュー

久松定成靖國神社崇敬奉賛会会長に聞く

新装なった遊就館。多くの若者に、靖國神社の本当の姿を知って、生き方を見つめてほしい。

最後の戦中派として

―　大役をお引き受けになられたご心境をお聞かせください。

久松　最初お話があったときは晴天の霹靂というか、そんな大役が務まるだろうか、と思いましたが、考えてみると私は戦中派最後の世代なんですね。終戦のとき、私は航空士官学校におりました。戦局厳しき当時、航空士官学校を選ぶということは特攻隊に行くのと同じようなものでしたから、私は英霊のお気持ちはよく分かります。それが実感できる最後の世代の者としてどうしてもお引き受けしなければならないと覚悟を決めました。

―　靖國神社を巡る状況は、厳しいものがありますが、抱負を。

久松　若い方にもっと関わっていただきたいと願っています。今、崇敬奉賛会員は八万七千余名おられますが、七十歳以上が七十八パーセントを占めているんです。つまり、若い方にもっと支えていただかないと、神社の将来に関わってくる。光明はあります。各種世論調査をみても、有事法制や憲法改正、首相の靖國神社参拝などに対する関心が若い人の間で高まってきています。昨年の八月十五日の靖國神社は例年の三倍の参拝の人々でにぎわいました。増えた分はほとんどが若い人です。そこで、神社では遊就館の新装開館を機に、「遊就館友の会」（※）をつくり、若い方の参加を呼びかけています。

愛に包まれた靖國神社

―　若い方に靖國神社に来ていただいて何をつかんでほしいと思われますか。

久松　靖國神社の本当の姿を見定めてほしい。靖國神社は戦争の施設だなどと左翼の人たちは言いますが、とんでもない無知と偏見です。靖國とは本来平和な国を意味しますが、昭和二十一年に出来た靖國神社規則には、「神徳光昭」「遺族慰籍（いしゃ）」「平和醇厚（じゅんこう）」とあります。つまり平和志向なんですよ。境内に群れる白鳩はその象徴ですが、ただ皆が平和を祈りながら、やむをえず戦いに到ったときに、愛する祖国を、愛する人を守るために戦い倒れられた方が御祭神なのです。

ひさまつ　さだなり　　日本会議愛媛県本部会長、元愛媛大学教授。大正15年、東京生まれ。旧伊予松山藩18代当主。陸軍士官学校第60期。学習院大学政治学科卒。愛媛県立松山農科大学（現愛媛大学）農学科卒。農学博士。伊予豆比古神社崇敬会会長。昆虫に造詣が深く、前日本昆虫分類学会会長。昭和天皇に御進講も。また皇居の生物調査計画にも参加。

靖國神社は大きな愛に包まれた場所です。聖書に「人、その同胞（とも）のために己が命を捨つる。これに勝る愛はなし」とあります。同胞のため祖国のため一つしかない命を捧げた行為は、世界共通の最高の愛と思われます。この愛の実践者が祀られているのが靖國神社なのです。

戦没学徒に取材した『靖國のこえに耳を澄ませて』（打越和子著、明成社刊）が最近出版されて話題を呼んでいるようですが、その序文に埼玉大学の長谷川三千子教授は「大東亜戦争もまた、わが国の英雄的叙事詩の時代にほかならなかった」と書いておられます。その英雄が祀られているのも靖國神社です。

この愛を実践し英雄的行為をなした英霊を祀る側にもまた愛があります。遊就館の入り口に母親の像が立っていますが、妻を娶ることもなく若くして散華した息子や兄弟のため、遺族の方が花嫁人形を奉納されています。「日本一美しい花嫁を捧げます」などの手紙を添えて。私は、あれを見るといつも涙が出てとまりません。

それから本殿の左手にある鎮霊社。たまたま今日がその例祭日(七月十三日)ですが、ここには、維新時の賊軍や日本人以外の戦死者を祭っています。国立の追悼施設をつくろうなどという「追悼・平和懇」では、日本人以外も祀るべきだという発言も出ているようですが、それはここにもうあるんです。その他境内には軍馬の像、犬の像などがありますが、動物まで祀ろうというのは、山川草木悉皆成仏という日本人の感性のやさしさが表れているのでしょう。こうした愛に溢れた小宇宙は、まさに世界に誇るべきものだと思います。各流派の華道家による、心をこめた神前への供花も、今年で五十年目を迎えますが、いわゆる戦犯として処刑された方々（昭和殉難者）も、この御社ならきっと安らかにお眠りになることができるでしょう。

遊就館で生き方を見つめてほしい

久松　追悼・平和懇に関しては、首相官邸のホーム・ページで見る限り、坂本・上坂両先生のご健闘に感謝しますが、官房長官サイドの国立追悼施設新設の意識が強く、決して楽

観が許されません。しかも、故筑波宮司の悲願だった前述の鎮霊社のことなどは全く論議されないように、政府や多くの委員方の靖國神社に対する知識不足が否めません。それで委員側から再三神社関係者を参考人として呼ぶ提案が出されましたが、何と政教分離を理由にこれも認められていません。しかし当神社に対する不合理な誤認や悪意は、その存立に重大な影響を与えるもので、吉田兼好式に「問わぬ限りは言わぬこそいみじけれ」と構えられる状況ではありません。

そんな中で、去る六月十一日に東京で国立追悼施設に反対する国民集会を開いていただいたことはとてもうれしいことでした。ああいうふうに世論を盛り上げていただくとありがたいですね。

―　一度じっくり遊就館を見学して勉強してから論議に臨んでほしいものです。

久松　そのとおりですね。ですから、とくに若い皆さんには靖國神社に参拝に来るときはぜひとも遊就館も見学していただきたい。それは御祭神について具体的なイメージが備わるからです。折りしも御創立百三十年の記念事業の一つとして、新館を増設、内容も一新した新しい遊就館がこのたび開館いたしました。

私自身、遊就館には思い出があって、幼い頃よく父母に連れられて行きました。正直いって小さいときは怖かった。縁日にはお化け屋敷もあって賑わいましたが、お化け屋敷よりも怖かった。なぜならあそこへ行って英霊の遺影や絶筆、遺品などに触れ、初めて死というものに対面するからです。初めは怖いだけだったのが、長じるにしたがって、人間の生と死というものを考えるようになりました。そしてこの方々が死を賭して守ろうとしたものがあったということに胸を打たれるようになりました。自己を犠牲にしてでも尽くすべき何ものかがある！という確信ですね。この祖国愛に生きるということはもっとも高尚な人間の生き方なのではないでしょうか。

戦後は、個人主義―インディビデュアリズム、これを取り違えている。本来のインディビデュアリズムには必ず責任を伴う。自己責任です。その限りにおいて自己犠牲も払うということです。それによって自分の人格なり個性を大きくしていく。個人主義にはそういう長所があるんですよ。特攻隊で逝かれた方も自分で納得して行っているわけです。単に強制されたというのではなく、自分の意志で特攻隊になった。私も航空士官学校へ進むにあたって別に強制があったわけではない。自分の意志で行きました。このように本来の個人主義には自己責任、自己犠牲というものが入っている。ところが戦後の日本ではそれがエゴイズムになってしまった。責任を放棄した状態。それが日本を悪くしている。その対極にある自己責任、自己犠牲の高い道義の世界が遊就館にはある。

御祭神が自らの命を捨てて祖国を守らんとした尊い行為。その一人一人の命の積み重ねによってこの日本という国は守り継がれてきた。その意味を遊就館を見学することによって体得していただきたい。その精神が受け継がれなければ日本の将来はないのです。後が続かないといけないのです。

（七月十三日インタビュー）

※「遊就館友の会」～二十五歳以下を対象。年会費　一口千円。遊就館の無料拝観、会報などの特典がある。お問合せは靖國神社崇敬奉賛会事務局（０３－３２６１－８１４３）まで。